

唐津和郎全集

才九卷

廣津和郎全集

第九卷

広津和郎全集 第九卷

定価四二〇〇円

昭和四十九年八月一日印刷
昭和四十九年八月十日発行

著者 広津和郎

発行者 高梨 茂

印刷者 山元正宜

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一一

電話（五六一）五九二一

振替東京三四

広津和郎全集

第九卷

目次

続文芸雑感

二三

文芸雑感

二

陽春月評

四

「点鬼簿」と「齒車」

四

「放浪時代」と「泥濘」

六

返答二つ

四

文芸時評序論

四

最近の女流作家

五

わが心を語る

五

政治的価値と芸術的価値

独歩と啄木

今年の文壇

芥川の嘘と真実

政治的価値あり得るや

平林たい子の作品

芸術派文学考察

文芸時評 (昭和五年七月)

文士の生活を嗤う

旅からの文芸批評

文芸時評 (昭和六年一月)

文芸時評 (昭和六年二月)

七

六

五

四

三

二

一

〇

一

二

三

四

この頃の感想	二五
嘉村礒多とその時代	二四
文芸時評（昭和七年五月）	二四
文芸時評（昭和七年七月）	二五
文学の本道を行く	二六
文芸時評（昭和七年十二月）	二六
文芸時評（昭和八年三月）	二七
作家・生活・社会	二八
秋声の「死に親しむ」	二八
純文学の為に	二九
直木に答える	三〇
『枯木のある風景』に就て	三〇

文芸時評（昭和九年五月）

二〇

チエエホフ私観

二四

文芸時評（昭和九年六月）

二三

虚無からの創造

三八

小林秀雄君に

三〇

人物のステロタイプ化について

三三

長篇小説の問題

三六

売言葉・買言葉

四〇

「純文学余技説」に答う

四七

読んだものから

五三

犀星の暫定的リアリズム

五〇

「小説は文学ではない」について

五五

歴史を逆転させるもの

二七

民衆は何故トルストイと袂別したか

二七

散文精神について（講演メモ）

二七

散文精神について

二七

何故に遠慮するか

二八

寒夜に想う

二八

「弱さ」と「強さ」

二九

如何に時局に対処するか

二九

全と個

二九

毒素と抵抗素

三〇

「麦と兵隊」と「黄塵」

三〇

徳永直の小説

三〇

批評家の脳の驕	三二
一本の糸	三四
散文芸術諸問題	三三
国民にも言わせて欲しい	三三
神の寵児とその反対の人	三四
政治と文学	三二
感心した作品	三七
秋声と白鳥	三九
美しき作家	三五
現代日本の画家	三九
中野重治の表現	三七
藤村と潤一郎	六〇

藤村覚え書

三二

秋声文学小論

三九

徳田秋声論

五五

嘘と嘘の積み重ね

四六

日本人の根性

四六

日本文学の視野の狭さについて

四九

公僕か公撲か

四三

自己の真実とは

四八

再び散文精神について

五一

多難なれども

四四

熱海にて

四七

「うつりかはり」と「思ひ川」

四三

カミュの「異邦人」

四七一

再び「異邦人」について

四七六

これからの文学

四九〇

まだ納得出来ない

四九四

歴史と自由

五〇一

「甘さ」を恐れるな

五〇九

ドライとウェット

五二一

「天平の薨」をよむ

五二三

日本政治の曖昧さがその温床

五二五

「細雪」について

五三〇

正宗さんの「アーメン」について

五三三

あとがき

評論

二

続文芸雑感

「生きて行く」について

暮の本紙に自分は「文芸雑感」という題で書き出し、いろ／＼な感想を述べて見るつもりでいたが、つい仕事の急がしさに、中止しなければならぬ事になった。その後を受けて、此処に続文芸雑感を書いて見よう。

その前に、自分は自分の『婦女界』に連載している戯曲「生きて行く」に対する秦豊吉氏の批評に一寸答えて置きたいと思う。これはその批評（それは秦氏の戯曲月評の中にあつたのだが）が『朝日新聞』に出た当時、自分は早速答えて見たい気を起させられたのだが、やはりやりかけていた仕事の急がしさに出来なかつた。それで今ペンを持った序に、書いて見ようと思うのである。

秦君は自分のこの戯曲は未完ではあるが多分最後まで芝居にならずに終るだろう、寧ろ短篇小説にして貰いたかつた、と云うような事を云っている。それもあつさりとは唯それだけ云つたのであるなら何でもないが、未完ものだから批評はさしひかえるというような顔をしながら、非常に玄人振った調子で、頭から「未完物」の後の部分に対しても、断定的な物の云い方をしているのである。大体日本の一幕物には、これから芝居が始まるというところで戯曲が終るか、或はいつまで立っても終に芝居が始まらずに戯曲が終るか、この二種類あるが、自分の「生きて行く」（自分の一幕物ではないが）も多分後者だろう——そう云つたような断じ方である。そしてその他それから筆の勢に駆られて、氏は芝居というものゝ講義をしている。自分は批評家として、そういう抽象的な断じ方を大体好まないし、殊に一つ一つの作の内容をも検する事なしに、「芝居になつてゐる」「芝居になつてゐない」で片づけて行く、而もそれが芝居者が「イタについてゐる」「イタについてゐない」という言葉によつて、新しい作家達の戯曲を、鼻の先でせうら笑おうとするのと同じ程度の調子の低さで（言葉は秦君らしい教養ある言葉であるにしても、秦君のあゝした批評の底に感じられるものは、調子が高いものではない）そんな風な物の云い方をする事を、自分は秦君のために取らない。秦君の研究的な文章（独逸の作家についての）

とか、印象記とか云うものは、自分は愛読した記憶を持つて
いるが、それ等には秦君の心の置き所にそう低さは感ぜられ
なかった。して見ると、月評というようなものが、うっかり
していると人の心持を低い調子に動かさせる種類の仕事なの
かも知れない。

扱て、「芝居になっている」「芝居になっていない」という
ような事は人々によって、解釈が違い戯曲に就ての夫々の目
的に依つても解し方が違うが、秦君が「多分芝居が始まらず
に済んだらしい」と断じ去つた「生きて行く」は自分から云
えば、寧ろ芝居になり過ぎるのを警戒している位なのである。
自分は真山氏の努力に敬意を払うと共に真山氏などの陥る大
芝居に対しては、甚だしく警戒する必要があると思つてゐる。
そしてその事を自分は述べてもいる。ところが「生きて行
く」は自分の日頃の言葉に似合わず、余りに芝居になり過ぎ
はしないかという事を懸念してゐるのである。

「生きて行く」は三月号で完結になるが、自分は既に書き上
げてしまつたその最後の場が、その意味で今でも氣になつて
いるのである。自分は一遍渡した原稿を校正の時取戻して、
大詰のところを幾度も幾度も考え直して見たのだが、そうし
ていてと益迷つて来るばかりなので、結局そのまゝ発表する
事にして、昨日『婦女界』に返してしまつた。案外それで
いゝのかも知れないと云う氣もするし、あれではおちつか

かつたかという氣もする。三月号が売り出される時分まで
は、自分にももつとはつきりして来るだろうと思つて、そ
の上で、単行本になる時訂正してもいゝ、というように今は
思つてゐる。——秦君からも完結の上で更に御教示を仰ぎた
いと思つてゐる。

中村武羅夫君が中堅作家（イヤな言葉だが）達が、婦人雑
誌の通俗物に逃げて行くという事を指摘した例の中に、自分
の戯曲をも挙げていたが、自分は「婦人雑誌」の通俗小説の
代りに、戯曲を婦人雑誌に書いてゐるのではない、もつとも
通俗小説が書けないから、その代りに戯曲を婦人雑誌に寄稿
してゐるのだとは云えない事はない。併し自分は別段調子を
落しているわけではない。殊に今度の「生きて行く」などは、
或部分婦人雑誌に不向きかも知れないとさえ思つたのだが、
そのまゝ調子を下げずに押通した。自分としては十分熱心に
本氣で書いてゐるつもりである。そして又本氣で書いてゐる
からこそ、秦氏の批評にも答える氣になり、中村氏の言葉に
もそれだけの事が云いたくなつたのである。

それからもう一つ序に云つて置きたいのは、十二月の『女
性』の「男の心、女の心」を直木三十五君がレーゼドラマだ
と断じ去つてゐる事である。そこに書かれてゐる会話を文章
で読む以上の効果は上演しても挙がらないだろうと云つてゐ
る事である。それはそうかも知れないし、そうでないかも知